



小中一貫教育だより

学校教育課・教育センター版

平成30年11月30日 No.9

(小中一貫教育推進だよりから 通算No.80)

十日町市教育委員会学校教育課



英語公開授業（まつのやま学園） ※裏表紙で説明

「若手教員サポート中間研修会」から

毎年、若い教員が多く転入する本市にとって、教職経験の浅い教員を対象にした研修は必要不可欠です。今年度の若手教員サポート事業は対象教員24名でスタートしました。

去る11月16日（金）には、今年度初の試みとして中間研修会を実施しました。冒頭、山岸指導主事から、当市の小中一貫教育の共通取り組み項目である「自己有用感を高める授業づくり」について指導がありました。その後、6班に分かれて、日々の悩みや自己の課題について意見交換を行いました。「どうしても教員主導の授業になってしまいがちで子どもの意見を生かした授業ができない。」「配慮を必要とする子どもの対応に悩んでいる。」「保護者対応の仕方がうまくいかない。」「子どものグループを生かした授業がうまくできない。」等々、教員であれば、誰もが突き当たるであろう悩みや課題を共有しながら、「悩んでいるのは自分だけではない。」という思いで聴いている姿が印象的でした。最後に、須田嘱託指導主事から、「研修は個人の上にはしか成立しない。他律的な研修であっても、自主研修の意識をもって臨め。これからの教員人生が右肩上がりになるか、右肩下がりになるかは、毎日の地道な研修にかかっている。」という趣旨の講話で締めくくりました。



研修会「不登校対策」「人権教育、同和教育」「いじめ防止対策研修」が行われました。

■ 新潟大学教職大学院の神村栄一教授を今回も講師としてお迎えして、今年度2回目の「不登校対策研修会」を11月21日（水）川西庁舎で行いました。今回は、「いじめによる登校渋りの生徒を不登校にしないためにどうするか」と題して事例をもとに、中学校区単位でグループワークを行い、その後、講師先生から具体的なポイントについてご指導いただきました。事例をもとにいじめ対応の問題点やその課題を明らかにして、課題解決のために具体的に学校で何ができるかを付箋紙に書き込みながら、グループで練り上げていきました。神村教授からは、いじめを把握する視点・教師の嗅覚の大切さ、対応は子どもだけでなく家族と共に行うことの大切さについて触れられ、グループワークで出された学校の組織での対応については「学校の都合でいじめ対応が進んでいる」として、現場感覚が大事であり、まず担任教師自身の対応力、教育相談力を高める必要があると強調されていました。



■ 部落解放同盟新潟県連合会の書記長を経験され、現在同連合会で専門委員をされている脇本正評（わきもと・しょうへい）様を講師にお迎えして、「人権教育、同和教育教職員研修会」を11月16日（金）千手コミセンで開催しました。脇本様からは『寝た子を起こすな』では解決しない同和問題」と題し、部落問題にかかわる歴

史的な経過と法律制定の動きについて、熱の入った講演をいただきました。差別の現実や差別を生まない同和問題学習・研修・啓発の大切さを学ぶことができました。参加者からは「差別の現実を分かりやすく教えていただいた」「教室や学校、地域で差別を生まないために努力したい」といった感想が寄せられていました。

■全国で講演依頼が殺到、著書多数の上越教育大学教職大学院教授・赤坂真二様をお迎えして最後の3回目となる「いじめ防止対策研修会」を11月27日（火）十日町情報館で開催しました。シリーズ3回「いじめに強い学校・地域づくり」と題して、いじめに強い学級集団作り・学校づくりに向けた教師の指導力アップのための指導は、さすが全国区の先生と感じさせる、まさに引き込まれる内容でした。参会者からは、「先生からお示しいただいた20ポイントチェックをぜひ自校化したい」「いじめ対応の具体的アクションが理解できた」や「来年もぜひ赤坂先生から学びたい」といった声多数等、納得の研修会だったようです。

7. 学ぶ～授業力向上研修Part2「算数・数学科」講演会から

10月15日（月）、十日町市教育センターを会場に上越教育大学教職大学院の松沢要一教授をお招きし、算数・数学科における「深い学びを実現する算数・数学の教材づくり」と題した講演会を実施しました。

近隣市町村を含め、32名の参加者がありました。以下に、その感想から主な声をまとめてみましたので、ご一読ください。

『子どものつぶやきや誤答、子どもの問いをを生かす授業を心がけていきたい。』（小学校）

『数学のおもしろさを実感させ、もっと数学好きな生徒を増やしていきたいと改めて思いました。』（中学校）

『疑問や問いを生む仕掛け、教材づくりの視点を教えていただいたので、早速やってみたい。』（小・中学校）

『生徒がもっと知りたい、と思う楽しい授業がしてみたい。』（中学校）

『教科書教材でもアレンジや工夫次第で、深い学びにつなげられることが分かった。』（中学校）

以上のような感想から、参加者の日頃の授業にかける思いや願いを感じ取ることができました。このことは、日々願っていてもなかなかできない現実があることの証でもあります。

これらの思いや願いを大切にしながら、12月6日（木）には中越教育事務所の山本俊介指導主事の講演「これからの算数・数学授業のあり方」で、さらに研修を深めていく予定です。

深い学びを実現する
算数・数学の教材づくり

1 学習指導要領改訂の方向性

2 日本の実態

3 諸氏の論説

4 「疑問や問い」を生む仕掛け(1)～(5)

日時:平成30年10月15日(月)15:00～16:30

会場:十日町市教育センター

上越教育大学 教職大学院
松沢要一(matuzawa@juen.ac.jp 025-521-3526)

4 「疑問や問い」を生む仕掛け(1)

教材の特徴

◆きまりや規則を発見できる教材をつくる

◆一部に不均衡な部分を仕組む

きまりや規則を発見する

不均衡な部分に気付く

「もし〇〇をすると、きっと〇〇」

「疑問や問い」を生む仕掛け(3)

教材の特徴

◆似てないのに、共通点があるものを準備する

共通点はないと思っていたのに、共通点があることに気付く

「えっ？どうして？」

「これまでの学び」とこれからの学びをつなぐ！

- ▼ 4年生児童が「こんぎつね」を読む。その後、児童は「ごん」の立場になり、「兵十」に手紙を書く。

「おれは、兵十にわるいことをしました。ごめんなさい。それからおれは、くりやいわし、松たけなどをおいていきました。毎日毎日もってあげました。それでも兵十のおっかあがつぐないにはたりないと思って、次の日も次の日もずっとくりをあげにいきました。だけど火なわじゅうでうたれて死んだのは自分のせいです。あそこでなにもしなかったら、ころされることもなかったし、いちばんたいせつな兵十のおっかあもたすかっていました。ほんとうにごめんなさい。でもさいごにおれがくりや松たけ、いわしをもっていったのにきづいてくれてうれしかったです。

ごんより

- ▼ 児童のまるっこい文字でそのままお伝えできないのがとても残念。この児童は、時間をかけて「ごん」と「兵十」を自分に重ね、じっくり考え、そして自分の思いを言葉に乗せた。この児童の心の底から静かにこみ上げてくる言葉の一つ一つをじょうずに引き出した教師の力は見事だが、児童の言葉には読み手の心を揺さぶる何かがあります。強さがあります。「ことばの力」とはこういうことなのだろうか。児童の一例を引きました。ここで、触れたいこと、今、目の前にいる子どものが、形や大きさ、色の違いはあっても、これまで共通した学習歴をもっていること、ほぼ似たような教室空間や同じ時期に同じモノを経験しているという事実があること。学習内容の「つなぎ」を考えると、「今」と「これから」をつなぐことに教師は知恵を絞り、心を砕きます。学習のベクトルは常に今を起点に据えるが常であるし、正しい。その「起点」を少し、学習者の過去に戻して、何をどのようなみちすじで学び、何を理解してきたのか、そしてどのような絡繰りでできるようになったのか、具体的な像で明らかにし、授業づくりの起点に生かしていくことが大切なのかなと考えます。

- ▼ 中学校の先生方、再度小学校の教科書を読んでみましょう。担当している教科の教科書の前に、まず国語の教科書を手にしてみましょう。時間はそうかからないはず。児童がどのような学びのみちすじで、「ことば」を学び、そして獲得してきたかが分かります。そして今、生徒の中に、たくさんの「ごんぎつね」たちの学習歴が存在していることも。そして時には職員間で話題にしましょう。



逆も真なりです。小学校の先生方には、中学校のテキスト（まずは1年生）に触れてみましょう。そして、こどもがやがて出会う未来を「今」にして、今を「過去」にしてみると何かが見え、よい知恵が浮かんでくるかも知れません。

- ▼ 望ましい「小・中連携」を私たちは、同僚や地域の人々と力を合わせ、試行錯誤しながら確かな歩みで進めています。立派な成果もたくさん報告されています。「つなぎ」の方法とともに、さらに「つなぎ」のなかみを再度一緒に考え、対話を進めていきたいものです。

(市教育センター嘱託指導主事 小林 豊)

読書のこと

読書の効用を否定する人はいません。また、「読書量が多い子は学力が高い」ということは様々な調査で明らかです。何より、読書の楽しさや喜びを知らない人生はもったいないし、悲しいです。しかし、読書生活が充実している子の割合は少ないのが現状です。読書出前授業で子どもたちに聞くと、読書が好きな子が多いのに、なぜでしょう？ テレビ、ゲームやスマホなどに時間を奪われることも大きな要因でしょう。しかし、私は「読みたい本との出会いが少ない」のがもう1つの要因ではないかと考えます。大人（教師や保護者）は、子どもたちが読みたい本ではなく、学年相応の厚さや文字数・難易度の本を読ませようとしします。ある程度読書力のある子は、それでもいいのですが、まだ読書に興味関心が少ない子にとっては、それではハードルが高く、読書嫌いになってしまいます。まずは、その子にとって面白いと思える本を手渡すことが重要です。絵本はもちろんマンガもいいです。どんな本からも面白さを感じたり、学んだりできます。

児童書の中で私の1番の愛読書は「ルドルフとイッパイアッテナ」（by 斉藤洋）です。4年生の国語の教科書に紹介されています。刊行されて30年以上いたっていますが、数年前にアニメ映画化されるほど色褪せない名作です。私は10年ほど前に初めて読んで、それ以来10回以上読んでいます。猫の話ですが、正義や友情、本当の教養とは…と学ぶことが多いです。出前授業では、「今でなくてもいいから1度は読んでね」と伝えています。子どもたちはもちろん、大人も読んでほしい1冊です。まだ読んでいなかったらぜひお読みください。

（市教育センター嘱託指導主事 高橋しげ子）

学校教育課・教育センター事業のお知らせ ～12・1月～

日程	内容【会場】	備考
12月6日（木）	保幼小連携合同研修会【千手コミセン】	保幼小によるグループワーク
12月25日（火）	特別支援教育研修講座【川西庁舎】	講師：堀口嘱託指導主事
	情報教育研修【十日町中】	スクールオフィス研修
	国語力向上研修【千手コミセン】	講話、演習等
1月18日（金）	特別支援教育研修講座【川西庁舎】	講師：ふれあいの丘支援学校 岡田教頭

【表紙の説明】

11月12日にまつのやま学園で行われた中教研指定授業、郡市教振指定授業の公開授業。小学4年生がお客さんに扮した参加者にパフェを作り英語でおもてなしする設定の中、片言の英語でお客さんの好みを聞きだしたり、おもてなしポイントを伝えたりしていました。